

Title: 「思い出だけ捨てればいいじゃない。」



太谷 可奈子
154センチ、45キ
ロ、A型、おうし
座。
すきなものは、アジ
ア・インド・家族・
ネコ・カレー・すし
です。

● 最近のエントリー

- 📅 はじめ (2007.03.29)
- 📅 卒業 (2007.03.20)
- 📅 無知との遭遇 (2007.03.03)
- 📅 ありがとうございました。 (2007.03.02)

● アーカイブ

- 📅 2011年12月
- 📅 2011年02月
- 📅 2010年02月
- 📅 2010年01月
- 📅 2009年09月
- 📅 2009年07月
- 📅 2009年05月
- 📅 2009年04月
- 📅 2008年11月
- 📅 2008年10月
- 📅 2008年09月
- 📅 2008年05月
- 📅 2008年01月
- 📅 2007年12月
- 📅 2007年11月
- 📅 2007年10月
- 📅 2007年09月
- 📅 2007年08月
- 📅 2007年07月
- 📅 2007年06月
- 📅 2007年04月
- 📅 2007年03月
- 📅 2007年01月
- 📅 2006年12月
- 📅 2006年11月
- 📅 2006年10月
- 📅 2006年09月
- 📅 2006年08月
- 📅 2006年07月
- 📅 2006年06月
- 📅 2006年05月
- 📅 2006年04月
- 📅 2006年03月

● 投稿カレンダー

● カテゴリー一覧

● ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE



思い出だけ捨てればいいじゃない。 > 2007年03月 アーカイブ

07.03.29

はじめ

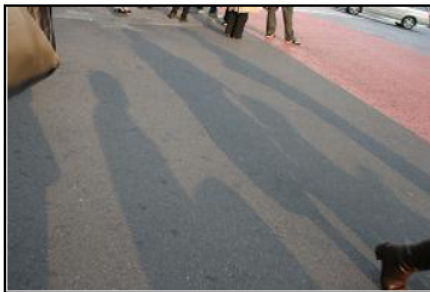
[Tweet](#)

[いいね! 0](#)

[チェック](#)







初仕事は、
家から4時間ほどかかる群馬県某市役所に一人で行くというものだった。

朝早く家を出た。
知らない土地に行くのは、
とても気持ちがうきうきすることだ。

こうやって遠出をするのは久しぶり。
二年生のときに圏央道の撮影をしていた時以来だろうか。
佐藤くんゆかりの地を越え、
山市くんゆかりの地を越え、
紺野くんゆかりの地を越え、
ここで育ってきたんだなぁなんて思いながら電車で揺られていると、
気がついたら線路の両側には見渡すかぎり広々と畑が広がっていた。

もうすっかり旅気分。
目的地に着くと、よくないことが私を待っていた。
思い返せば朝から運が悪かった。
あかさたな占いでかなこの「か」行は、
仕事運、愛情運、全体運、すべて最低だった。
化粧中、コンシーラーを一張糞ともいうべきズボンに落としてしまい、
汚れてしまったのだ。
ティッシュでこすったものの、汚れは落ちるところか広がってしまった。

そして市役所に行く前、急いで昼ごはんを食べようと、
20分くらい歩き回ってやっと見つけた定食屋でソースカツ丼を食べた。
お茶も熱かったし、味噌汁も熱かったし、急いでどんぶりを平らげたので、
はっきりいって私は汗だくだった。

しかし食後にコーヒーが出された。
私はコーヒーが苦くて飲めない。
汗だくだし急いでいるし苦手だし絶対に飲みたくなかったけど、
優しいおじいちゃんが出してくれたもの、
一口も飲まないわけにいかないじゃない。
仕方ない。
少し飲んでみるか。
ミルクを入れてみよう……
と思ったら、
コートにミルクが
びゅっ
あっっ

あ~~~~あ。
なぜこんな目に……。
とにかく時間がなかったから飲めるだけ飲んで、
急いで店を後にした。

口の中が苦かった。
そして市役所に向かって歩いているとき、
なんと、
転んだ。

肩にかけていたカメラは地面にぶつかるわ、
ズボンのひざはぼろぼろになるわ、
散々な目にあった。

よくつまずくことはあるけど、
転んだのなんて何年ぶりだろう。
とてもショックだった。

ひざはとても痛かった。
家に帰って見てみると、
両ひざとも青くなっていた。

とても幸先の悪いスタートだ。
しかし、もう春。
群馬では桜が咲き始めていた。

ぼかぼかと暖かくて、
新しく学生になる人や、
私のように新しく社会人になる人や、
いろんな人の始まりを、
迎えてくれているみたいだった。

渋谷の桜はもう満開だった。

カテゴリ:

post by 大谷 可奈子 | 日時: 2007.03.29 | [パーマリンク](#) | [トランプバック\(0\)](#)

[思い出だけ捨てればいいじゃない。](#) > 2007年03月 アーカイブ

07.03.20

卒業

[Tweet](#)

 いいね! 0

 チェック

しました。
本当に色々なことがあった三年間。
フィールドワークコースで体験したことは、
並みのできごとではありません。

徹夜で孤独な暗室作業、
鳥さんの屠殺、
アジアやアフリカの人達との農作業、
棚田でのぬかるみからの脱出劇、
アジアの旅、
写真を撮ることを通して本気で自分と向き合って、
自分のためさに悔しくて泣いたこと、
人の優しさをたくさん感じたこと

数えたらキリがないけど、
全部一人ではできなかったこと。

私に大切なことを教えてくれた
先生

ルエ、
旅先で出会った人、
家族、
そしてクラスみんなに心から感謝しています。

本当にみんなのことが大好きです。

私は、
大好きな人達に気持ちを伝えることができたのかな。
大切にすることができていたかな。

カテゴリ：

post by 大谷 可奈子 | 日時: 2007.03.20 | [パーマリンク](#) | [トラックバック\(0\)](#)

[思い出だけ捨てればいいじゃない。 > 2007年03月 アーカイブ](#)

07.03.03

無知との遭遇

[Tweet](#)

いいね! 0

チェック





大石芳野さんの写真展を見に行った。
「眼差しの向こうにあるもの～アジアの子どもたちと戦争・平和・未来～」というタイトルだった。

怖かった。
別に怖いシーンが写っているわけではないけれど、私はとても怖かった。

会場の外に出ると色々な人が色々な事をやっていて、気持ちを落ち着ける暇もなかった。

怖いことは嫌だけど、世の中で起きている怖いことを知らないのはもっと怖いんだと思った。

カテゴリ:

post by 大谷 可奈子 | 日時: 2007.03.03 | [バーマリンク](#) | [トラックバック\(0\)](#)

[思い出だけ捨てればいいじゃない。](#) > 2007年03月 アーカイブ

07.03.02

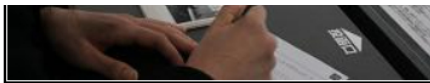
ありがとうございました。

[Tweet](#)

[いいね! 0](#)

[チェック](#)





キヤノンタワーギャラリーで一ヶ月間開催されていた卒業作品展が、昨日無事終了しました。

遠いのわざわざ来てくださった皆様、本当にありがとうございました。
DMIは出したけど、正直あんなに来てもらえるとは思っていませんでした。
忙しい合間をぬって来てくれた人、
閉館ぎりぎりに駆け込んで来てくれた人、
就活中でスーツ姿のまま来てくれた人、
彼氏、彼女を連れてきてくれた人、
楽しみにして来てくれた人、
長いメッセージを書いてくれた人、
・・・・・・胸がいっぱいです。

授業での私の作品の評価はとんでも低かったけど、
でも自分がやりたいと思うようにやってみて、
だめでも何でもとにかく自分の半年間の結果として展示ができて、
人に見てもらえてよかったです。

そして私は、ずいぶん人の感受性を甘く見ていたんだなということに気がきました。
私が思っていたよりずっと、
人は写真をじーっと見ると、
写真の前で考え込むし、
楽しんでいるし、
想像して、
感じていました。

私はフリーに行ってこう感じたから見る人にもそう思ってもらいたいけど、
でも無理だよなぁそこまでは、
この写真でそんなことまで考えてもらおうなんて。。

と頭の中がグルグルしていたら、
見に来てくれた友達がさりと、私が感じた事と同じ感想を私の写真を見て言ってくれました。
びっくりしました。
私の写真に限らず、そうやって誰かが撮った写真に感情移入して見てくれているとは思っていませんでした。

展示が終わり、気持ちの面でもスケジュールの面でも一段落です。
と言うより、もう全部が終わって卒業するだけです。
少し、寂しい感じがします。

カテゴリ:

post by 大谷 可奈子 | 日時: 2007.03.02 | [バーマリンク](#) | [トラックバック\(0\)](#)

[思い出だけ捨てればいいじゃない。](#) > 2007年03月 アーカイブ

07.03.01

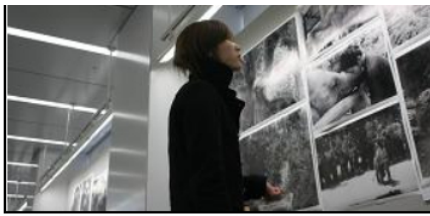
交わって流れる

[Tweet](#)

[いいね! 0](#)

[チェック](#)





アジアに行ってびっくりしたことがある。
フレンドリーの極みのようなカンボジア人やインド人に、
「日本人はフレンドリーだから好き」
と言われたことだ。

私が東京で生活している限り、日本人をフレンドリーだなんて思ったことはない。
友達以外の知らない人と話すことなんて全くないし、
友達だって学校とかじゃないとそうそうできない。

なぜ日本人をフレンドリーだと思っただろうか？
それはなんとなく帰国してからわかった。

久しぶりに友達と会う。
旅であったことを話す。
アジアでは色々な人と話す機会がある。
友達ができる。
あたたかく迎えてくれる。

それを聞くと友達はたいい、
「へえ～そういうのっていいね。」
と言う。
みんな心のどこかでそんなものに憧れを持ってる。
そして求めている。

父にブリーの話をしたとき、
「日本も昔はそうだったんだよ」
と言っていた。
だからきっと、そうやって人と人の関係があった時代に生きていない今の若者は、
コミュニケーションを必要としているのだと思う。

そんな欲求が、海外旅行に出かけて、
現地の人々のあたたかくてフレンドリーな雰囲気によって満たされる。
吐き出すことができる環境があって、相手がいる。

考えてみれば、自分もそう。
海外では人見知りしないで誰とでも話せた。
でも日本では何故かそれができない。
私は帰国してからたくさんの友達と会って話をした。
たくさんの若者がコミュニケーションに飢えている。
私にはそう思えた。

二週間ほど前、初めて行った町をぶらぶら歩いていた。
まだ個人の商店がたくさん残っている静かな町だった。
お肉屋さんがあったのでコロッケを買うことにした。
「すみません」
と言うと奥からおばさんが出てきて
「今お家で油の温度下げちゃったからしばらく待ってくれる？」
と言われた。
15分くらい待つことに。
待っている間おばさんは
「何か用があってこの町に来てるの？何もないとこでしょう？」
と話しかけてくれた。
何もないけど、
コロッケを買うのに人と話せるって素晴らしいことですよ？
私が住んでる町では、買い物をしたってマニュアル通りの機械的な会話しか望めない。
「でもいいところだと思います」
と答えた。
私はもっと人と話したい。
でもどうしたらいいのかまだわからない。

カテゴリ：

post by 大谷 可奈子 | 日時: 2007.03.01 | [パーマリンク](#) | [トピックバック\(0\)](#)